

令和2年度 シンポジウム ～「表現」って何だ!?!～

令和3年2月20日(土) 13:30～15:30

【参加申込者数】

オンライン参加	会場参加	関係者	アーカイブ視聴	合計
8人	2人	7人	54人	71人

【シンポジスト】



本郷 寛 氏 (東京藝術大学名誉教授)



中津川 浩章 氏 (アーティスト)

【シンポジウムの内容】

- ① 自由な美術活動空間の報告 (記録映像の視聴)
- ② 自由な美術活動空間の感想 (記録映像を基に)
- ③ 学校における美術教育について
- ④ アート活動を続けていくためには



【シンポジストの主な発言】

〈普段できないことができる空間〉

- ・いろいろな画材があり、大きな画面があり、4～5時間書き続けられる。参加者の気持ちの盛り上がりに応じていける。
- ・美術や芸術は、遊びの要素から変化していくもの。遊びと積極性、主体性を分断しないようにする。一つを否定することが、発展していく可能性の否定につながる。

〈新しい発見の機会・場〉

- ・美術活動を通じて、子供が自分自身の新しい発見をする。新しいものに出会うという繰り返しが大事になる。
- ・描いて終わりではなく、展示することで自分を客観的に見ることになり、自分の存在を肯定したり、発見したりする。他の子供の良さも発見していく。学校に美術の展示スペースを作っていけるといい。自由に展示でき、描ける場が地域にあるといい。

〈画材とは〉

・画材というのは奥が深い。自然物との出会いが作品になることもある。教育では絵の具とかを扱うことで、画材に表現が引っ張られてしまうことがある。



- ・子供たちの興味をひくものを用意しないと新しい表現とか創造性とかは生まれてこない。ワークショップの材料を決めたとき、視覚・触覚・臭覚など、子供たちの興味を引く物を、子供の気持ちになって、同じ目線で集めた。
- ・会場に来て何もしようとしなない参加者が、粘土を触っているうちに、こねだし、最終的に絵を描いていったこともあった。

〈自分の価値を押し付けない〉

・運営側の価値基準ではなく、参加者の感受性の幅に基準を置くことが大事で、積極性・創造性をいかに引き出すかが重要となる。



・美術は描き方を教えるだけでなく、表現するきっかけを整えていくもの。「表現できる」、「表現できることの喜びを知る」ということのきっかけを作っていくことが大切。自分が感じたことを外へ出すことを経験の中で築いていく。

・子供たちの内面の価値が共有されないと、子供たちに孤独感や分断が残ったり、言葉での表現が難しい子供たちは自分を表現しなくなったりする。表現は、成長する上で大きな要素である。

〈美術の強み〉

- ・美術は、作品があるということが魅力で、作品が独り歩きしていつてくれる。障害のあるなしは関係がない。作品がよければよい。
- ・美術をとおして触れあることができる。この人すごいという思いが大人になって、差別でなく凸凹を自分の中に取り込み、文化や生活が豊かになる。
- ・人間教育として表現はとても大切。特別支援教育の美術こそが、美術教育の根本的なものを変革できるのかもしれない。

【令和2年度を振り返って】

表現とは、内面にあるものを表出するだけでなく、表現により内面にあるものを育ていけるということを実感した。継続してこのような空間を作っていくことの意義を強く感じる事ができた

